

凌辱を救え 派面ライダー

ビルの谷間でセーラー服を着たピチピチの若い娘が、目の前に立っている、痴漢風の若者を嫌悪の眼で見ると、

「助けて!派面ライダー!」

と叫んだ。彼女は右手に握り締めた、小さなリモコンのようなものをスカートのポケットの中に戻す。セーラー服の上着の胸は、未成年者とは思えない程、豊かな曲線を描いている。彼女の前の痴漢らしい男は、大声を上げられて驚いたが、誰も来ないので、彼女に数歩近づき、胸に触ろうと右手をあげた瞬間、

「とおおおっ!」

という男の掛け声が聞こえて、痴漢らしき若者は右手を蹴られていた。

「うわっ。」

痴漢のような青年は声をあげた。彼の眼には、白のアイマスクのようなものを目の辺りにつけた中年の男性、服装は白バイの警官に似たも

のだが、白バイの警官の服装の白い部分が赤色になっている、その男が連続的に右足を上げたのが見えた瞬間、頭の、こめかみを蹴られてドウ、とアスファルトの地面に痴漢未遂の、その男は倒れた。

顔は、どう見ても二十歳のセーラー服の女は、そこそこの、いい女だ。彼女は両手を胸の前に握り締めて、祈りのようなポーズを取ると、

「ありがとう、派面ライダー。」

と感謝の言葉を口にした。

白バイの警官に似た、その中年男は、

「いえ、どういたしまして。ここらを通りかかっていた、ものですかね。今日は水曜日で、ぼくの休みの日ですよ。リモコンの無線で呼ばれたのに、気づきました。」

と照れながら、自分の行動を説明した。ビルの谷間で、人は通るのが少なく、道の先は行き止まりで、ビルの壁だ。大人二人が横に並べば、谷間の道は塞がる。人の通っている道からは、そこは五メートルは離れている。派面ライダーと呼ばれた男のバイクは、ビルの谷間の

入り口近くに停めてあった。

「派面ライダー、お礼に抱いてください。」

セーラー服の二十歳の女は、ビルの壁を背に、声を、中年の背は中背で、白いアイマスクの男にかけた。

「ええっ?いいのかなー、そんな事して。」

「ここなら、人も気づきません。あんな、勃起もしない若い奴に触られるより、中年の、あなたの方が好き。」

百五十六センチの彼女は、大きな胸を自分で両手で掴むと、

あはん、と悶えた。それを見るなり、派面ライダーは白バイの警官の服装に似た格好で、女子校生に近寄ると、

「ごっつあん、しようかな。いただきますよ、あなたを。」

と言うと、彼女を抱きしめた。大きな胸が派面ライダーの腹の上あたりで潰れる。派面ライダーの右手は、女子校生のスカートの尻を撫で擦った。尻を触られて彼女は、喘ぎ始める。

派面ライダーは、そこで顔を下に向けて行って、彼女にキスをした。

彼女は派面ライダーの中年の唇が触れると、唇を開いて舌を出し、派

面ライダーの唇を舐める。中年男の派面ライダーも唇を開き、女子校生の唇の中の赤い舌に、自分の舌を絡めた。

派面ライダーは女子校生のスカートの前を擦ると、彼女の股の間は、スカートの上から触っても濡れていた。女子校生は唇を離すと、

「派面ライダー、早く入れてよ。」

と、おねだりした。

「ああ、わかったよ。」

すでに勃起していた彼の股間のモノは、ズボンの膨らんだところが女子校生の臍の下あたりに当たっていたのだ。

派面ライダーは女子校生のスカートの中に手を突っ込むと、ショーツを下げて彼女の膝の辺りまで下ろした。それから自分のズボンのジッパーを降ろすと、容易に大きなキノコのようなモノは、パンツの切れ目から突き出てくる。

派面ライダーは膝を屈めて、少し上げると、彼女の濡れた裂け目にスルリと淫欲棒を入れた。女子校生は、

「はああああーっん。こんな、ところで、するのは、初めて。」

と悶え始める。彼女のピンクの内部は、ざらついていて、自分の淫欲棒が刺激されて気持ちいい。太陽は南中していた。真上から照りつける太陽の光は、女子校生の淫欲裂から、派面ライダーの淫欲棒が出ては、入るのを照らしつけている。そのうち中年の派面ライダーは、膝が痛くなってきた。ので、淫欲棒を一旦抜いて、

「バックからしようよ。膝が痛くてね。」

と女子校生に話す。

「いいよ。後ろから突いてくれた方が、もっと気持ち、いいかも。」

女子校生はクルリと向きを変えると、ビルの壁に両手を突いて、大きな尻を突き出すと、スカートを右手で上げた。

すいか、のような彼女の尻肉の下の中央には、もっこり、と、ふくらんだ肉の中心に淫欲の裂け目が派面ライダーの眼についた。彼は、まだ天を向いている自分の欲棒のかたまりをズーン、とスムーズにズームインさせたのだ。

「ああん、大きいのを感じるわ、派面ライダー。」

女子校生は、黄色い声を上げる。派面ライダーは、赤い手袋をしたま

ま彼女の尻を抱えて思う存分、突きまくった。ずんずん、ずいっず
いっ、と。「ああん、もう、こわれて、しまいそうだわっ、いい、天
国に、いきそうっ。」

十分もすると、女子校生の内部の締め付けが強まってきて、派面ライ
ダーは、

「ああ、おっ。」

と声を上げると、どくっ、どくっ女子校生の淫穴の中に、出しきれ
るものは全て出した。

波山飛苧(なみやま・とぶお)四十歳は、うだつの、あがらないサラ
リーマンだった。福岡市内の不動産会社に勤めているが、不動産会社
を転々としていた。主に賃貸住宅の仲介をしている不動産屋を流れ歩
いている彼は、いつでもヒラの社員だ。

福岡県福岡市は人口百五十万人を越えて、マンションやビルも増え
る一方、不動産会社も増えているので競争は厳しい。

東京からの不動産会社も参入してくる。福岡市の都心部は東京さなが

らの人口密集地帯で、いつの日か二百万を超える人口になるに違いない。

波山飛芋の父は福岡県庁に勤めとおした役人で、長男の飛芋に波の山を越えて飛ぶ、飛び魚のような人間になってほしい、という思いから飛芋と名づけたのだ。

高校を出た飛芋はバイク便のライダーとなって、重要書類を届けて回っていたが、働きながら学べる不動産の専門学校に通い、宅地建物取引主任者の資格を取り、不動産会社に転職した。

しかしながら、不動産物件の案内などは自動車で回るのが常だ。飛芋は自動車運転免許も持っているので、顧客の案内も会社の車で行っていたが、好きなバイクに乗れないので、不満が、つのっていた。

飛芋は三十にして、ワンルームの中古分譲マンションを買い、そこで暮らしている。福岡市の中心に近いワンルームマンションだ。三十五歳の時に変装趣味を覚えて、白バイ警官の服装を購入した。白い部分を赤く染めると、250ccのバイクに乗り、サングラスを掛けて車道を走った。

道行く車の運転手や、バイクの運転者は彼を白バイの警官と間違えた。よく見ると、赤い色の部分がある服装なので、気がつくはずだが、気がつかない。飛苺は爽快になった。

彼はマンションの七階にある自分の部屋に戻ると、アイマスクに似た、目の部分は穴の開いたものを、両目に当てて、後頭部にゴムひもを掛けると、

「変チン、」

と声を出しながら、両腕を、まっすぐにして肩の上に上げた。万歳の格好に似ているが、両手のひらは前にではなく、横を向いている。互いの手の平が、向き合っている形だ。

「おおっ。」

と飛苺は次に声を出すと、両手を降ろして、股間に持っていく。両手でズボンの上から自分のモノを触ると、すでに、それは固く太くなっていた。

(いける、じゃないか。これで、変チンすれば即、勃起している。どんな女とも、すぐに、やれるだろう。とは、いっても、若い女とな

ら、だが。)

飛芋は高級物件を案内したキャバクラの女性と、その部屋に行った時に、二十三歳の、その可愛い女は、

「誰も居ないしさ。ここでセックスしようよ。」

と玄関のドアを飛芋が閉めた時に誘った。

「え、まさか、そんなこと、できるわけ、ないでしょう。」

飛芋は一応、否定した。キャバクラの可愛い女は、ふん、と笑って、

「勇気ないのねー。わたし、お客さんから毎晩誘われているけど、五人に一人としかセックスしないのよ。今は二月で客が少ないから、マンコに入れる本数が減ってるからさ、あんたのモノ入れてくれたら、この部屋に決めるよ。」

と話して、スカートを自分の胸まで引き上げた。

彼女の股間は、真っ赤なショーツだった。まるで、闘牛が闘牛士の赤い布キレに誘われるように、飛芋は興奮して勃起した。

「お客さん、いいんですね。会社には内緒ですよ。」

と灰色のズボンの前を膨らませて、飛芋は聞いた。

「そんな事、誰にも言わないわよ。立っているじゃない。ちんこ出したら?」

とキャバ嬢は挑発した。

「出しますよ。そーれ。それから、こうする。立ちシックスナイン。」

飛芋は瞬時に自分の肉棒をジッパーから引っ張り出すと、キャバ嬢の前で逆立ちをして、手を交互に動かして逆立ちのまま、身を反転させた。

立っているキャバ嬢の目の前に、飛芋の勃起肉棒が床を向いて硬直していた。

「ええー、凄いわ。しゃぶるね、ちん棒。」

細い白い指で、キャバ嬢は飛芋の血管の浮き出たモノを握って、亀頭から口に入れると、

ふぐ、ふぐ、と音をたてながら、自分の頭を長い髪を振って上下に揺らせた。飛芋の目の前に、キャバ嬢の股間は、なかった。

「泉沢さん、あなたのオマンコは見えませーん。」

と逆立ちして、太くさせた肉棒をしゃぶられながら飛芋は、わめいた。キャバ嬢は口から太い肉棒を抜くと、

「ごめん。しゃがむわね。ショーツは、わたしが、おろすよ。」

彼女は、しゃがんでショーツを膝まで降ろすと、そのまま、自分の割れ目が飛芋の顔の前に見えるように近づけた。ああ、かわいいキャバ嬢の、男の棒を啜えたくて、しょうがない膨らみと、少し開いたピンクの縦の裂け目が飛芋の眼に、うつったのだ、彼は逆立ちの手を交互に少し進めると、キャバ嬢、泉沢のマンコの縦の淫裂に口をつけて、舌を出して舐め捲くると、

「あー、いいわー。逆立ちしている男に、アソコを舐められるのは初めてよ。」

と悶えて自分の乳房を両手で持って、飛芋の床に向いて硬直している肉を乳房に、はさんだ。上着の上からではあるが、気持ちいい、と飛芋は感じると

ピュッ、ピュッ

泉沢の上着の胸に射精してしまった。彼女は慌てて、

「ちょっとー、何するのよー、この上着、高いんだから。カシミヤなのよ、五万するの。」

文句を言う。萎えたチンコは、やはり逆立ちしているので、床を向いている。その姿勢で飛苺は、

「すみません。ここの家賃七万円でしたね。手数料は一か月分なので、五万円ぼくが払いますから。」

と話す。キャバ嬢は、にこり、として、

「そうしてね。わたしの福岡銀行の口座に、入れといてよ。もし振り込まなかったら、この件は、あんたの会社に、ばらすわよ。」

「わかりました。なるべく早急に・・・。」

「いつまで逆立ちして、小さなチンコを、ぶらさげてるのよ。」

「すみません。戻ります。」

飛苺は手を動かすと、背中を泉沢に向けて、足は彼女の目の先の床面に下ろした。着地して、慌てて小さくなったモノをズボンに仕舞い込んだ。

と、というような過去もあった。紹介した部屋で、水商売や風俗の女は誘ってくる場合もあったが、思うように挿入した事はない。それは追々、彼の追想で出てくるかと思う。

さて、彼の変チンポーズだが、飛芋は変チンと叫んで、両腕を真っ直ぐに天に上げた時に、頭の中でAV女優の裸体を思い浮かべる事になっている。旬の女優が、いい。数年前に人気があったAV女優も、いつのまにか消えてしまうことが多いものだ。

「変チン、」

で、AV女優の裸の股間に、頭の中の視線を合わせると、むずむず、と肉棒に血液が流れ込み、

「おおっ。」

で完全に勃起している。

最初に暴漢に追い詰められた女性は、キャバ嬢だ。彼女は中洲のキャバクラ、「女子校生」に勤めている。波山飛芋も時々、遊びに行くキャバクラである。彼は、

「おれ、変身ポーズでチンコ立てられるんだ。」

と接待している女子高のセーラー服を着た、二十歳のキャバ嬢に話した。

「きゃっ、チンコなんて露骨だわ。でも、すごいよね。」

と持ち上げてくる。

「ここで、して見せようか。」

「いいわ、やってよ。」

飛苺は立ち上がると、

「変チン、」

と叫び、両手を手のひらを内側に向けて、真っ直ぐに挙げた。その時、彼の頭の中にはAV女優の裸が浮かんでいる。

「おおっ。」

と叫んで、股間に手を回すと、完全に勃起しているのが、目の前にいるキャバ嬢にも分かった。その二十歳のキャバ嬢は手を叩いて、

「すごいなー。ちんこ、立ってるわ。変チンのポーズ、ここの、みんな

なに伝えておくから。」

と話した。

それから飛苺が、そのキャバクラに行くと大モテとなった。あるキャバ嬢は、

「波山さん、いつか、お休みなのかしら？」

と聞いたので、飛苺は、

「水曜日が休みですよ。不動産屋だから。」

と答えてしまった。

「そうなの。わたし、リモコンみたいな無線連絡機器を持っているから、それで連絡を送るわ。」

その無線の連絡が、あのビルの谷間の危機だったのだ。

「ほんの、お遊びのつもりが、身の危機を救ったわ。」

と、あのビルの谷間にいたキャバ嬢は仲間に話す。